

C. S. ルイスの物語詩『ドラムの王妃』一考察

川 崎 佳代子

C. S. ルイスは『囚われの魂』と『ダイマー』を書いたのち、詩人としてのキャリアは断念したようである。しかし、詩そのものは終生書き続けた。ただ、1920年代以降、詩の主流は、エリオットに代表される自由詩に取って代われ、ルイスの好む物語詩や長詩は時流には乗らなかった。彼は兄あての手紙で、『神仙女王』、『序曲』、『指輪と本』、『地上の楽園』、その他二、三の長詩の仲間入りができるような英語の詩を発見できるチャンスがもうないと、不満を漏らしている(1928年8月2日付けの手紙、『C. S. ルイス書簡集』)。にもかかわらず、ルイスはその後三つの物語詩を書いた。出版したいと言うよりむしろ、自分の楽しみのためである。自分の読みたい児童書としてナルニア物語を書いたのと同様、自分の読みたい長詩として、書いたのだといえよう。

『ランスロット』、『名のなき島』、『ドラムの王妃』のうち、最後に書かれたのが、『ドラムの王妃』である。1918～1938年の間に書かれたと考えられている。1927年1月16日付のルイスの日記には「ドラムの王」に着手したと記入されている。日記によると1925年に手がけたものに再び着手したのだが、それ自体も1920年ごろ書いた「野生狩り」を手直した分である。その「野生狩り」はさらに遡り、1918年ブリストルで書いていたものを下敷きにしたものである。1927年2月27日付けの日記には、第一歌において、王妃が大法官や将軍、大主教たち相手に話をしている箇所を手がけていると言及されている。「ドラムの王」がいつ「ドラムの王妃」になったのか日記からは不明である。「王」から「王妃」に変更された理由も検討に値するが、十分な資料がないので、ここではあまりふれない。とにかく、完成された詩は『ドラムの王妃』(Queen of Drum)として1938年春、桂冠詩人ジョン・メイスフィールドに送られた。それに対し、メイスフィールド

川崎 佳代子

は感想を寄せており、メイスフィールドとネヴィル・コグヒルの〈オクスフォード・サマー・ダイヴァージョン〉で、ルイスが朗読した(1938年8月4日)。

『ドラムの王妃』が完成したころ、ルイスはすでにキリスト教に回心しており、『天路退行』(1933)を書き上げていた。ルイスは『不意なる歓び』の中で、合理的な領域と想像力の領域に引き裂かれている自己についてふれている。「事実となった神話」としてのキリスト教への回帰が、結果としてディレンマに和解の道を提供したと述べている。『ドラムの王妃』には、四つのタイプの生き方が描かれている。超自然に憧れを抱く王妃、想像的なものに無関心で、現実世界での力に固執する将軍、魔術の世界に若さを求める王と大法官、そして形式的な宗教を口にする大主教が登場する。王妃は想像的世界のリアリティを信じ、最終的にはエルフの国に住むことを選択する。本稿では、詩をたどりながら、テーマについて検討することにする。

第一歌

第一歌は、つぎの会話で始まる。

(急いで! さいごのチャンス. まもなく夜明け.
振り返ってみて. なんてすばらしいところでしょう.
—あそこから来たのよ. うしろで扉が
だんだん閉じていく. それで何もかも見えなくなるわ.
急ぐのよ. 目がさめても忘れないように. わたしの顔をよく見て.
また来るのよ—手をとって—ああ 日が昇る—
忘れないで—待って! —また来るのよ・・・)

忘れないでって、誰を?

そこにいるのは誰? 返事したのは誰なの. 何にもない、夜明けの

C. S. ルイスの物語詩『ドラムの王妃』一考察

冷え冷えとした憂鬱な感じだけ。 月が沈んだわ。
終わってしまった。夢だったのかしら。みんな忘れてしまうでしょう。(I:1
~12)

(以下詩の訳は筆者による)

夜が明けかけている。二人はそこから異なる世界へと別れることになっている。この会話は括弧の中の台詞がエルフの一人で、あとの台詞は王妃と思われる。夜のあいだ王妃はエルフの国で遊んだようである。日が昇ると日常世界に戻るが、エルフは夜の世界を忘れないように頼んでいる。ここでは王妃には、それが現実だったのか、単に夢だったのか判然としないでいる。

場面は変わり、ドラムの王の寝室が描かれている。「やせさらばえ」、「乱れた白髪頭」で、「日の光に目をぱちくりさせるフクロウさながら/どんよりした目をこすりながら、歯のない口でもぐもぐつぶやく」(I:22~23)王は、明らかに王妃よりずいぶん年長である。身支度を手伝わせながら、いくら寝ても疲れがいやされないと、不平を囿っているが、ドラムという国の立地条件のせいであるかのように、王は言う。

入れ歯をくれぬか。・・・ああ、疲れた・・・皆のものー

何もかも 谷に住むせいなのだ。木が多すぎる。

ドラムの国では 一日中寝ていても ちっともよくならん。(I:24~26)

そもそもドラムという語は何を意味しているのであろうか。おそらく「谷に住む」という王の言葉がヒントになるだろう。drumには、谷に囲まれた狭い丘陵という意味がある。ルイスはおそらくそうした地理的な意味をもたせていると考えられる。

身支度を整え、執務室へ行こうとする王と王妃が出会うが、このときの会話は緊張感が漂う。王は四肢に活力のある若い王妃をねたんでいる。また、夜王妃が

川崎 佳代子

寢床を留守にして徘徊していたのは、なにか不倫めいたものとかんぐっているようである。

これはこれは 早いことよな、妃よ
若い手足はさすがに しなやかというわけか、
ほんの少しの睡眠で元気になるとはな、もしかして
夜半 そちは出歩いていたのでは一半時以上も
床を離れて、まことか。(I:36~40)

王妃は王の皮肉にも口をきこうとしない。意志の強い、はげしい性格が見て取られる。

・・・王妃はじっとしたまま
口をきこうとしない。王妃もまた疲れており、静かな顔から
血の気が失せていた。強い風のせいで、
髪がみだれ、瞳には 荒れ模様の空が
映っている。冷やかな灰色の瞳は
遠くからさえ さえざえとしている。
男であれ 女であれ そんな瞳を見つめたいとは思わぬほど
泰然とした気配が漂っていた。現世を忘れる目であった。(I:44~52)

「現世を忘れる目」を持つ王妃にとって、王もその周りの世界も眼中にない。ディオニュソスの巫女であるメーナドと王は王妃を腹立たしげに呼ぶ。彼女の憧れが度を超して狂気に映るのかも知れない。

次に王と側近たちの会議の様子が描かれている。昼でも暗い部屋の中に、物憂い雰囲気だけがただよっている。ここは、ひとかけらの若さも感じられない、停滞した見せかけだけの世界である。その中で、異質な王妃はまた責められるのである。

彼女は自分がエルフの国を逍遙していることは現実で、まるで知らぬかのようにふるまっているが、大法官も、大主教もみな同じ穴のむじなではないかと反論する。

・・・五時間前まで

あなたはどこにおられたのです—そして誰とご一緒だったの—

ここから どのくらい離れたところに?

夜明けがあなたを呼び覚ましたとき

さわどいところで目を覚まし

どんな翼をかりて ここへ馳せ参じたのですか。改まった目つきをし、

もったいぶった話しぶりをして、別のところで見せる

もう一つの顔や声を隠していらっしゃるのね。(I:221~230)

王妃にとって、どうして夜の顔と昼の顔を使い分けるのか理解に苦しむのである。かれらは「まるで宿舎の外で出会い／通り過ぎても挨拶を交わさぬ陰謀者のように／ああ 愚かな人たち! もし共謀者がみんな／一人を裏切ったら、その人は身を守ることもできずに／首を吊されたり、焼かれたりするのですか。沈黙の約束を守るために」(I:246~251)と、王妃は強い口調で言い募る。しかし、彼女の言葉は人々に何の感興も与えない。王妃は「胸がふるえ、深い怒りのため／熱い涙がでた。唇をかみしめ、手を握りしめたが—／すべてはむなしい」(I:309~311)ことに気づく。

第二歌

ここでは王と大法官との会話を中心である。王は「王妃は今日具合が悪い」と言って引き取らせたが、内心王妃の発言に不安を感じていた。会議が終わったあと、大法官に、王妃の「長口舌をどう思うか」と尋ねている。

川崎 佳代子

かりに そのようなことがあれば、
つまり、どこかに秘密の階段や、いまだ発見されていない館が
世界という家の中にあるとすれば われわれの知っている
部屋と部屋のあいだに 真っ暗な空室が—
みなが見ている舞台の裏に
内部の舞台がある・・・もし そういうことがあれば・・・ (II:51~55)

大法官も「目覚めているときに、何か・・・追いつきそこねたような／気がする
ときが。なんだかわからないのですが・・・目がとらえたたん、すでに建前の
世界がはじまっております」(II:72~75)と答えている。王もまた、「判読容易な
／この平易な世界は、人が、より大きなものを削除することによって／選ぶ世界」
(II:126~129)だと感じている。二人は「奇妙にうち明けたい気分」(II:90)になり、
はしゃいで昔のことを話し出す。王妃が「ダムを壊し」(II:99)、「扉という扉を
開け放した」(II:96)ので、王たちは少年時代の自然の中で戯れる、楽しい日々
を思い出したのである。王妃の空想癖は彼らにとって若さの象徴と思われたので
あろう。

子どもの頃・・・覚えておらぬか
(十二才ころじゃろう)ある暑い九月のことを
月桂樹の下で、猟犬と
あのジプシーの少女を連れて—カエルを殺した日のことを。(II:140~143)

しかし、彼らは「おやじどの」と呼ぶ大主教のもとには行かず、酒に酔いしれた
勢いをかり、地下牢に閉じこめた占い師(魔術師)を尋ねて地下深く潜ってい
く。このあと、将軍はに二人を幽閉し、クーデターを実行するのである。この老
人たちはノスタルジックな思いを再現すべく、光ではなく、闇に方向をとるの

である。その結果はみずからが地下牢に閉じこめられることになる。

第三歌

第三歌は、塔での王妃と大主教との会話を扱っている。王と大法官が占い師を捜しに地下へ降りていったこととは対照的に、二人は塔へ上っている。王妃は塔から西に広がる光景に目を輝かせる。「そちらに目を転じると、彼女の瞳は輝き、心が躍るのだった。」(III:13)ここで、王妃が西の方向を見ていることに注目しよう。ルイスは『朝びらき丸 東の海へ』において、アスランの国は東の果てにあるとしている。トルキンの『指輪物語』では、エルフは最終的に西の国に引き上げるところで終わっているように、エルフの国は西というイメージをルイスも用いているようである。エルフの国は、太陽の上、命を表す東ではなく、イエーツの薄暮の世界にある。これは、日の暮れと死を暗示する方向であることを心にとめておく必要があるだろう。ともあれ、王妃のころは、狭いドラムの国ではなく、豊かな自然と超自然の世界に向けられている。しかも、自然の美は超自然の美を指し示しているのである。これは19世紀のロマンティストと共有する考えである。『不意なる歓び』において、ルイスは、空想の世界はすばらしく、現実世界は無味乾燥に思えたと述懐している (*Surprized by Joy*, p.170) が、王妃は若きルイスに似ている。ルイスと違い、王妃には想像力をもてあましていう実感はなく、憧れは抑制されていない。それを観察しているのは大主教である。彼は地に足をつけない王妃を諭すが、彼女は、エルフのような「不死なる人々」の存在を信じ、その世界との接触が可能であると考えている。事実それを体験していると言う。王妃にとって、エルフの国を逍遙する経験は、リアリティであって、そこで、大主教とも会っている。誰も嘘だとは言わせないと激しく言うが、大主教には、記憶がない。「そのような気はするが、定かではない」(III:44)と告げる。王妃にとってのリアリティは、他人には夢または空想になるのである。とはいえ、大法官も、「王妃が夜の記憶を留めようと／されているのを・・・私

川崎 佳代子

どもはすっかり忘れておりますのに」(II:146~148)と王にうち明けていた。また、王も「ああ、いまましいことだ—王妃は生身のからだであちらの世界へ行くのだ」(II:149~150)と、実は王妃の言葉を信じつつ、うらやましがっている。

わたくしどもは 行きませなんだか？

けさ 王妃が話をされていたとき

わたくしは しらをきっておりましたが

ひざがしらが 痛んでおりました。

すりむいた臍が 頭の先まで ズキンズキンと痛んでおりました。

困ったことです—どうしてベッドでひざに打ち身ができましたうや。(II:151~155)

王は、

それは 気の毒にも不思議なことじゃ・・・まるでアシジの

フランシスのような

聖痕では・・・脆弱なからだで

十マイルも向こうでダンスをすると どう感じるじゃろう。

・・・魔女の呪文で起きあがる蠟人形のようなじゃ。(II:156~159)

と反応する。

この二人もエルフの国のリアリティを半ば信じかけている。彼らは酒のせいもあって、妙に浮かれ、エルフの国が実在するのか、占い師に聞こうとする。この人物は以前魔術を使ったとして投獄されている。それも、20年前のことなので、おそらくは死んでいるだろう。しかし二人は地下牢へと降りていく。この行為は王妃の行動と異なるだけでなく、大主教とも異なる点で、興味深い。大主教は、王妃に向かって、「真理というものは、言語を介すると冷却し硬化し、誤謬となっ

てしまうようなもの」(III:21~23)と言い、「言葉はうまく伝えることが出来ない。目覚めているときの会話は、夢のなかの出来事に届くことがない」(III:24~25)と説くのである。大主教は、現実と想像力を区別し、両者ともリアリティであるかも知れないが、

話してみてもどんな益があるというのでしょうか。

あなたが歩いたと言われる場所のことをいくら話してみたところで、そこはわたしたちの国ではないのですから、神仙の国ではわたしたちは死ぬこと、また生きることもないのです。(III:59~61)と諫める。

手近にある美を拒み、愛すべき大地に腹を立て
美を探しに暗い道を通り、
現世の彼方に幻の世界を夢見るがゆえに
もっとすばらしいものを永久に失うこと
それをわたしは大いに恐れるのです。(III:64~67)

他人が現実と認めない世界に遊ぶのはほどほどにするよう忠告する。王妃ははげしい目つきで大主教を睨む。「落ち着いて、その目を鎮めなさい」(III:37)と大主教はなだめるが、王妃は納得しない。

より大きな喜びへの あくなき欲求は
わたしが育てたものではありません、わたしが生まれるよりもっと
古いものです。
いつになったら わたしは安息を得るのでしょうか、安住の地を
いつ見つけるのでしょうか。
大主教さま、あなたは幸せな生涯を送ってこられました。

川崎 佳代子

大義名分をかかげて

この世の大道を祝福されてきました。あなたが楽々と歩まれるところを
私にはそうではありません。血だらけのひざをつけて 裸で

歩くようなものです。

もし この使い古した、永遠に続く世界がすべてなら—もしわたしが
かい間見た国から渡ってくるそよ風を失うくらいなら、

今夜 首に縄をかけて

憧れを終わらせます。

でも、そうではありません

あなたは—あなたの言葉は半分真理を語っているのに—あなたは
お話にならない。ああ、お慈悲をかけてください。

(この渴きのため腐った墓の中で身を焼く思いです。)

神父様、お話になって。本当のことを、どうぞおっしゃって。

はっきりと違うか、正直にそうだとおっしゃって。

あなたもあの場所へ行く道を見つけられたのではないですか。

そこでわたしたちは顔を合わせたのでは？ (III:75-92)

「より大きな喜びへのあくなき探求」が、個を越えたものと王妃が考えていること自体特に新しいことではない。ルイスが『天路退行』の序文で述べているとおり、古代より彼岸への憧れを告白している詩人は多い。自分の属する世界はここではない、どこか別のところにある、という思いは多くの人々が共有する、人間普遍のものであるとルイスは述べている。王妃がしようとしているのは、そういった世界へのジャンプである。しかしそれは危険な行為でもある。大主教は、王妃の心に「嵐が吹き荒れている限り、平安はない」(III:100)、だから「何か他のものを見つけなさい」(III:102)と忠告するばかりである。王妃には「何か他のもの」がどういう事かわからない。

よくお聞き、不可視のものには二種類ある。
お互いにかけて離れたところに在る。
ちょうどこの城の暗い地下牢が、
この緑の山や金色に輝く太陽と異なるように。
一つ目は、私は知らない。
もう一つは下にある。そこでは
こだまする洞窟を広大な混沌が行来し
魂の地下室にうごめいている。追放されたものどもや、
愚かな巨人が古代より咆哮しながら、
彷徨い、傲慢な希望、手のつけられない恐怖が
この成熟していない宇宙をもとめている。キメラや幽鬼、
魍魎魍魎が跋扈している。あなたは、どちらかといえば
激しい欲望に駆り立てられ、幸せな岸辺に港を設けるといよりは
こうした岩を打ちつけているみたいだ。
望むということは、危険なことなのだよ。(III:104~118)

これに対して王妃は、下降の旅はよく分かったが、「光の領域」への旅について何か言うことはないのかと問う。大主教は、「誰でも知っていること以外は知らない」(III:124)と答え、自分が「よく知っているのは古いワインの識別であって／神の血が流されたその対象についてより、ずっと知っている」(III:131~134)と告白する。聖職者にありながら「不可知論者」(doctor of nescience)であったと今告白している。このことから彼が王妃の率直すぎる憧れに影響を受けているのがわかる。

それでもわたしは信じるのです(かりにこの汚れた口から出る
そのような言葉が馬鹿げたものでないとしたら)
わたしたちの知性をこえた彼方から、

川崎 佳代子

唯一の御言葉が人のところにやってこられた。
ことばは人となり、手足を持ち、
地上の国々を歩かれた。
そして死んで、甦られた。
そのお方以上のものは これからも来ることはないし
それ以前にも来られなかった。

だから 従うことは
この現しみのベール以外の
どこかをつつきまわすような
困難な試みよりよいのです。
そのベールは形なき光と焼き尽くす喜びの
底知れぬ深淵を隠してくれているのですから。(III:160~173)

大主教は、王妃の神秘主義的な傾向にたいして、聖人や聖書が教えることを信じる方が無難であると述べる。

今、肝心なときに差し上げられる
わたしの忠告はこれだけです—
行って、教理問答と教義を学びなさい。
わたしの生き方を見るのではなく
わたしの言ったことを心にとめなさい。(III:180~182)

王妃は大主教の言う、教義にはうんざりしていると告げる。「色あせた諦観、長い受難、従順と救済」(III:188~189)、そんなものがわたしにとって何になるのかと王妃は言う。王妃の求めるのは、「歓喜にあふれる不死なる人々」(III:191)や「月光に照らされた、聖なる山々」(III:192)である。教義は「白い経帷子」(III:193)であり、「聖壇のように冷たく」、「その上のろうそくの光同然薄暗い」

(III:194) のである。「彼女のこころをかき鳴らすのはそんなものではない」
(III:195) のだと言う。

美に誘われ、孤独な場所に導かれるときはいつでも、
暗い記憶がわたしにとりつき、いつまでも疼きをおぼえさせる。
想い出は、無慈悲で、愛にあふれたところ、
遙か彼方の舞踏や、遠くにいる人々の顔、
それらがわたしにささやくの—「これを見て、これで何を思い出す?」と。
どうして訪なうことをやめたり、忘れることができるでしょう— (III:196~
201)

この箇所は、ルイスの全作品に一貫して見られる「歎び」のテーマである。『天路退行』の序文において、ルイスは「歎び」が突き刺すような痛みをともなった経験であると述べている。王妃の憧れもまた、現実生活を希薄にしてしまうほどの、強い願望である。大主教のいう宗教は彼女の憧れを満たすにはあまりに魅力がないのである。

二人の長い会話の間に、地下へ降りていった王と大法官はとらえられ、将軍がクーデターを成功させる。今や「リーダー」と自称する将軍は、ヒットラー、ムッソリーニを彷彿させる。この詩が完成していた1938年までに、ドイツではヒットラーが台頭してきている。また将軍は自らを「総統」(führer) と言う箇所からも、ヒットラーを念頭に置いていることは明らかであろう。

第四歌

第四歌は、リーダーとなった将軍の演説で始まるが、部下たちが三歌の最後に「新世界が始まった一偉大な先祖の時代が／ドラムに戻ってきた」(III:231~232)と喜ぶ状況が描かれている。腐敗した貴族や、老齢の無能な王に対し多くの

川崎 佳代子

不満が鬱積していたのであろう。將軍はそうした好機をねらって、クーデターを起こす。不可知なものにうつつをぬかす王妃の存在も好都合であったかもしれない。

呼ばれて、王妃と大主教は塔から降りていく。王妃は死ぬか逃げるか考えている。彼女はアルテミスが味方だと思って、ほほえみすら浮かべている。それに対して大主教は、「謙遜のはしご」(IV:18)を降りていくと描かれている。今までの生ぬるい信仰から、彼はキリスト教こそ全てであると覚悟し始めている。これは、先の王妃との会話から続いている彼の心境の変化を表している。王妃の行為は王と大法官だけではなく、大主教にも影響を与えたのである。彼のはしごを降りる行為は、天国への階段を上る行為でもあると、天からそれを見つめる人々(聖徒たちであろうか)の視点が導入されている。

將軍は、ホールで二人を待ち受けており、支配者然とした態度が描かれている。

・・・將軍はここに立っていた、大きく

両足を広げて、どっしりと立っていたので、まるで

城全体の重みを両肩で支えるかのようであった。(IV:22~24)

彼は、「わたしは運命であり、力であり、総統である、わたしを拝め」(IV:31, I am Fate, and Force, and Führer)と叫ぶのである。勿論これは、キリストの「われは道であり、命であり、真理である」をもじったもので、神と等しい存在になるという宣言である。

王妃の会議室での話に將軍は影響を受けたのであろうか。王妃の徘徊は若い女性特有の夢にちがいないと彼は考える。夢となると彼自身も奇妙な夜を過ごしたことがある。しかし「彼の経験豊かな手でめんどろな見せかけを和らげてやらどうだろう」(IV:45~46)と密かに思っている。経験的に將軍は、フロイトと同じ理論に到達していたとルイスは言う。つまり、王妃の夢遊病的な行為は、年寄りの夫をもつ若い妻の欲求不満のせいだと彼は判断しているようである。

將軍は王と大法官を地下牢に閉じこめ、反対者もすべて殺してしまった。もう彼に背く者はいない。そして、「さあ、こんどはあの娘だ」(IV:83)と言う。ここで、彼は王妃のことを、“the girl”と呼んでいる。王妃を王妃とも思わないどころか、対等にすら考えず、自分のしもべのように扱っている。

次に、王妃と大主教、將軍の対話である。これ以降、王妃と大主教の行動が交互に歌われている。リーダーは二人に「王は死んだ」(IV:87)と告げる。それは「自然の摂理」(IV:89)であるとも言う。王妃にたいしては、「政治は女のすることではない」(IV:86)と言い、「従うものには、わたしはよくする。特に女にはな」(IV:97~98)と言い、王よりも自分はずっと夫としてよいとほめかしている。しかし、かれは一つの条件を王妃に言い渡すのである。

わたしは嫉妬深い男ではない。一つだけ守れば

おまえを自由にしておいてやろう。

夜の徘徊はもう禁止だ。その話をしてもいけない。

はっきりと禁止する。

馬鹿げた話だ。したがって、おまえは夜

床についていなければならん—わたしのベッドにな。(IV:108~112)

王妃はすぐに彼の意図がわかり、とりあえず時間稼ぎのため、將軍を喜ばす台詞を吐いて塔へ戻る算段をする。將軍は承知するが見張りに少年をつける。また、逃げた場合は死刑であることも告げる。

次は將軍と大主教との会話である。將軍は、自分の支配を万全にするため、大主教に協力を求める。つまり、国家の宗教としてドラム風のキリスト教を築くことである。治世者に都合の良い宗教ということである。大主教は、それに対し、「わたしは神を信じているので、嘘はつくことはできない」(IV:203)と毅然とした態度をとる。ここでは宗教と政治の対立が少し語られる。「測りしれないものをもてあそぶことはできない」(IV:211)とも言う。第一歌の大主教とはなん

川崎 佳代子

という違いであろう。第一歌では、大主教は次のように描写されている。

彼の隣でもっとくつろいでいるのは、
大主教で、さらに船をこいでいる。バラ色の顔をして
信じられないえくぼを浮かべ、船をこぐたびに
ますますあごひげとガウンの中に顔を埋めていく。
— 泡のような銀色のあごひげに、真っ白な手を
胸の上で静かに組み、ぽっさりとした手は
— すべすべで、荒仕事をしたことのない手だ。騒がぬ心は幸せて、
教会堂の墓所に鎮座する記念像のようだ。(I:95～103)

リーダーは支配者の言うとおりにすれば、大伽藍も建ててやろう。ユダヤ人などを自由に捕まえさせてやろうと賄賂で釣ろうとする。このあたりは、ヒトラーがユダヤ人を根絶やしにしようとしたことや、当時のキリスト教会の多くが、ヒトラーのいいなりになり反抗しようとしなかったことを示唆しているととれるだろう。頑強に拒否する大主教にたいして、彼の変化をリーダーは指摘する。

一年前、十年前だったか、それとも十五年前だったか
お前は神のことなど考えなかったではないか。
ドラムでは、官職が売りにだされ、
人民の半ばが食べるものにことかき、
それというのも、大法官が小麦をすべて買い占めたからだ。
王妃は魔女のように夜うろつき、
年老いた王は九人も十人もの妾を囲っていても、
お前は目をつぶっていたではないか。(IV:232～239)

無責任であった大主教をなじり、「土壇場になって本性をあらわした」(IV:241)

と言い、「下手にでたが、こうなれば有無を言わさぬ」(IV:248)と部下を呼んで大主教を逮捕させるのである。

一方、塔へ向かう王妃は監視の少年の間を見て、王の結婚のプレゼントであった腕輪で少年を殴り、素早く塔から降りて城を抜け出すくだりが描かれている。

將軍の命令を拒否した大主教は、枷をはめられ、パイプと杖で固定されて、拷問を受ける。大主教は十字架にぶら下げられた自分を想像した。そして、

彼はキリストに呼びかけ、罪の許しをこう、早く天国に
入らせて欲しいと頼んだ。

．．．．

ひどい殴打が加えられ、
大主教はくずおれた、彼の両脇と肋骨は打たれ、
内臓が飛び散り、頭蓋は碎け
男は死んだ、神はその魂を天へ召した。(VI:297~304)

第五歌

追っ手を気にしながらもはつらつとして逃げる王妃が描かれている。メイスフィールドは、王妃がエルフの国へ逃避する箇所は、「たぐいまれな美」を感じたと述べているとおり、西空に日が沈むころ、「草がいつそう緑に映え/干し草が甘い香りを放つ時刻」、勝手知った道を急ぐ王妃は、息をきらせながらも辺りの美しさに歎びを感じるのである。エルフの国に近づくにつれ、「世界はいつそう清らかなり、光はさらに強く/川や滝、至る所に流れる小川のせせらぎが、静かな大気の中で響いている」(V:56~58)。

丘の頂上にたどり着いた頃日は西に沈み、さらに向こうの高い峰を望むことができた。いったん足を止めたが、猟犬の鳴き声にせかされて彼女は走り抜く。彼女は今や走ることに集中しているのである。やがて、最後の人家を通り過ぎ

川崎 佳代子

る。王妃は夜の徘徊の途中「魔女」とか「売女」とか呼ばれたことがある。そして、森の中へ入り岩だらけの場所にいた。キツネが近寄ってくる。それから世界が変わっていくのである。

世界が変わっていく。夜が目覚めたのだ。

山はしじまに包まれ、全てが異質のものになっていく。(V:119~120)

月の光が強く、彼女の影がくっきりとうつつ。「両手を挙げ、／加護を祈るわけでもなく野生の荒ぶれた魂を／壊しも祝しもする月の女王／をほめたたえた」(V:127~130)のである。王妃は、ヘカテ、ダイアナ、タイタニア、アルテミスに呼びかける。すべて異教の女神の名である。ルイスは回心する前、正統的なキリスト教が、想像力を刺激しないのにひきかえ、異教の神話は魅力的であると述べている。王妃も大主教の教義問答などより、異教の神々に祈りを捧げる方を選ぶのである。

見下ろすと、谷は縁まで月光があふれた杯のように見えた。谷に向かって苔むした道が続き、さらに二本の道が谷底で合流する。三叉路に達したとき、彼女のそばにぴったりと寄り添うように、「地上の馬よりずっと美しく、大きい馬と、その誇り高き乗り手」(V:183~185)がいることに気づくのである。旧式の鎧と、エルフの銀の剣を身につけている。彼女にほほえみかけたのは、

常春の国から来た青白き王であった

王妃の方にかがみこみ、親しげに、差し出したのは

露のように白い、甘いパンであった。神仙の国に入るときの味見のパンである。月明かりのなかで、黄金のようにうすい蜂蜜色をしていた。

王が口をひらいたとき、偽りの言葉は、夕暮れには早すぎるツグミの未だ整わない調べのように胸にひびいた。

最初の調べは不安定で、それから銀のように押し寄せてきた。(V:192~198)

騎士は次のように王妃に呼びかける。

中央の苔むした道をたどりなさい。

十字路をとおり、望みの土地へ行くのです・・・

・・・

だれも飼っておくことのできない蜂からとった、強い蜜を食べなさい。

右手の道にはかまうのではありません—その道は天の高みに

いたる道です。そこでのくびきをあなたから

取ってあげたばかりではありませんか。

左へも行くのではありません。世界の割れ目を抜けて

名のなき世界へ行くことにならないように。

真ん中の道をしっかりと行くのです。門を見つけなさい。

選ばれた人々が、世界の端で、その門から入るのです。

天の軍勢も、暗黒の軍勢も

踏み込んだことのない島々—だれも知らない土地

神の世界では寓話としてしか現れない国、

神と同じように、人の耳に封をするものはだれか・・・

いにしえの住まいが多くあり、

天の戦いも破ることのない島々

森も大地も、あなたを苦しめた

あの欠乏を癒してくれるのです。(V:199~216)

王妃は決断に際して、自らが消滅するような気分になる。彼女の周りで、肉体も溶け、世界が崩れていくような思いになる。そんなときに、彼女のよく知った顔が現れ、話しかけるのである。

早く。最後のチャンスです。エルフの誘いの言葉を信じてはいけません。

川崎 佳代子

娘よ、もどるのです。自分を大切に下さい。
常春の国へ行くのではありません。そこに住む人々は
十年に一度、住人の十分の一の魂を地獄に支払うのです。
約束する声に聞きしたがわず、むしろ命令する神の声を聞きなさい。
わたしたちには恐れるに足る罪がありますから。
怒りを招くものではありません。怒りは遠くにあって、
目覚めるのに遅いのです。日の暮れるまでに家路をたどりなさい。
苦しみの中から見上げても、あの顔は見えないでしょう。
ただあの方の上着の裾だけしか。娘よ、走って行って、その縁にくちづけしな
さい。(V:255~62)

彼女の見知った顔というのは、明らかに殉教した大主教の顔である。王妃は、その顔が死人の顔のように見えないが、死者の中から話しかけていることを知る。死んだ大主教の魂が王妃を最後に救おうと現れたのであろうか。彼の言う「家路」とは、主キリストへの道のことである。真の平安は主のもとにあると訴えるが、王妃は拒否する。

いやです。

もしあなたが神とともにおいでなのなら、かまわないでくれるよう
祈ってください。
それとも神がわたしを八つ裂きにするよう祈ってください。
行って、ここから去ってください。わたしのそばに来ないで。(V:265~268)

霊の「さいごのチャンスです」という呼びかけは、冒頭のエルフのによる詞句と呼応する。王妃は最後のチャンスを一蹴すると、もはや迷いからふっきたように、

今や彼女は何も求めず
ただ人の世からするりと抜け出し
右も左も見ずに
まっすぐ歩んでいった。彼女は神仙の糧を食したからだ。(V:287~290)

ドン・W・キングは、彼の『詩人ルイス』(Don W. King, *C. S. Lewis, Poet*, 2001)の中で、王妃のエルフの国への強烈な憧れが、読者にそれほど共感を抱かせない、と指摘している。そして、詩の中で、もっとも感情移入がしにくい人物であると述べる。

これには二つの理由があげられる。まず彼女が王や閣僚たちにむかって挑戦的な態度をとるところは見事である。アンティゴネを彷彿とさせるが、彼女が出会う人々との対処のしかたには堅さがあり、それが読者に感情移入させることを阻むのである。王妃はあまりにも自己の殻に閉じこもり、自信があり、自己を正しいものとしているようである。二番目に、彼女が妖精にひかれる強さの度合いを理解する読者はほとんどいないということである。したがって、彼女が天国よりエルフの国を選択するのは、よく言って賢明でない。悪くすると、愚かなほど無謀であると思われるのである。(p.167)

この詩には、想像力が与える三つの影響が語られている。王妃が立ち止まった三叉路がそれを象徴するが、その場にはいない王や大法官、大主教などが、それぞれの選択をしていることをこの詩は告げている。王妃は超絶的なリアリティを希求している。彼女にとっては、この世の美は、その世界への指針であり、超絶的な世界に入るまで、魂の安息がない。エルフの国は、いわば、彼女の憧れの約束であり、その手段というキングの指摘以上に王妃はエルフの国の実在を信じている。王妃の信念にイエーツの影響をみとめられる。『天路退行』において、「鳥」の幻視がジョンの憧れを引き出し、それを求めて世界を放浪するが、王妃にとっ

でも、エルフの国は、ジョンの島に相当する。しかし、ジョンは自分の憧れを忠実にたどり、徒花に悩まされながらも、憧れのもとの場所が、彼が一番避けたがった領主の山であることを知る。そのためには、道連れとして道徳の具現者であるヴァーチューと、マザー・カーク(教会)の介在を必要とした。王妃は、マザー・カークにあたる大主教の忠告に耳をかさず、やみくもに憧れにむかって走るのである。詩の中で、「走る」という動作が何度も繰り返され、王妃の焦りをよく示している。

もう一つの選択は、王と大法官のものである。王妃の超自然的な話に刺激を受け、彼ら二人は、正統的な教会のリーダーである大主教に答えを求めず、地下の魔術師に頼ろうとする。これは、ルイスが一時期オカルトに引かれことを示唆している。しかし、ルイスはまもなくオカルトへの関心を失う。オカルトは三叉路で言う左の道にあたるだろう。もう一つは大主教の殉教に表される。彼はなまらかな聖職者であったが、王妃との会話をとおして、彼女が信じがたい超自然の美に憧れ、それに殉じようとしている態度に刺激され、最後に自分の信じる宗教に殉ずる覚悟をする。「謙遜のはしご」をくだる大主教は逆説的に天国へつづくはしごを上ることになるのである。かれは、右の道を土壇場になって選択したのである。超自然や想像力は、大主教の場合、キリストの十字架に収斂されるのである。キングが指摘するように、「危機に陥ったとき、それまでくすぶっていた火が火花を散らすきっかけとなる」ようにルイスは考えているのかも知れない。

1933年に『天路退行』を書いたルイスが、『ドラムの王妃』で逆戻りをしているとは考えにくい。『ドラムの王妃』を最終的に校正したのは、ルイスの回心後と判断されるのは、1938年に公表している点や、詩の最後の締めくくり方である。三叉路において王妃が選択を迫られる場面は、フーパーの言うとおりに、13世紀の詩人エルセルドンのトマス作「トーマス・ライマー」を下敷きにしている。トマスにとって、先導者はエルフの国の女王である。

あの陽気な道が見えませんか
羊齒の土手に沿った道が
あれはエルフの国へ至る道、
今宵あなたとわたしが行くところ

これは『ドラムの王妃』における「常春の国から来た青白き王」の誘いの場面より幾分陽気である。どちらかというところ、三叉路の場面はトマス・ライマーよりキーツの「つれなき美女」のイメージに近い。13世紀の詩よりずっとロマンティシズムの影響を感じる語り方となっているからである。しかし、結びはドライで風刺が効いている。

それで、話によると、彼女は世界から
姿を消した。しかし今日、彼女が神仙の国で
夢を見ているのか、はたまた、地獄で目覚めているのか
(チャンスは十分の一) だれにもわからない。 (V:290-5)

ルイスにとって、制御できない想像力や超絶的な世界への憧れは、キリスト教に受洗されないと危険なのである。これを、baptized imaginationとルイスは呼んでおり、正統的なキリスト教を介して初めて想像力は聖なるものとなり、エルフの国ではなく、天への指標になると考えている。『ドラムの王妃』も『天路退行』も同じテーマが扱われているが、王妃のあこがれには、キングが指摘するとおり、十分な「客観的相関物」が描き込まれていない点で、『天路退行』ほど十分テーマが展開されていないくらいはあると思う。「チャーチ・タイムズ」の書評子が、「『ドラムの王妃』のような比較的効果的な詩において、彼[ルイス]が散文で書けばどれほどうまく書いたことだろうかと、何度も思ってしまう」(1969.12.24)と記しているのもうなずける。ルイスには、オクスフォード入学前に、ウィリアム・モリスやイエーツを通して「歎び」の訪れを体験した時期があった。そのこ

ろルイスは「ランスロットと聖杯伝説以外には関心がなく、他方では原子と進化論と兵役のことだけを念頭においていた」(Joy, p. 174)という。また、シャートル時代に寮母によって呼び覚まされたオカルトや、イェーツ、メーテルリンクを通して知った超自然主義にたいする欲求を持っていた。「ドラムの王妃」では、超自然主義へのあこがれの体現者が王妃で、唯物論的世界の代表が將軍であると解釈できよう。その後オクスフォードに入学後哲学をとおして観念論を信じるようになった。しかし、信頼する友人のオーエンバーフィールドがシユタイナーの神智学に傾倒したことでショックを受けたこともあった。1927年1月18日の日記には「神智学や精神分析が、正当の観念論と競り合っている・・・へたをすともっとも幼稚な迷信に逆戻りする危険性ははらんでいる。そうでなければ迷信を回避するため、教条的な唯物論に走り込む危険がある」ので、「ドラムの王」がすつきりさせてくれたらと思うと書き込まれている。類推でしかないが、ルイスがキリスト教に回心した時点でドラムの「王」から「王妃」に変わったのではないだろうか。日記や『不意なる歓び』と併せて『ドラムの王妃』を読むと、1920年前後から1930年代のはじめの頃のルイスの心の動きが浮かび上がってくる。その意味で『ドラムの王妃』も一つの自伝と解釈することができよう。

参考文献

1. Lewis, C. S., *Narrative Poems*, edited by Walter Hooper, Harcourt Brace Jovanovich, 1979.
2. Lewis, *The Pilgrim's Regress*, Wm. B. Eerdmans, 1981.
3. Hooper, Walter, *C. S. Lewis: A Companion & Guide*, Harper Collins, 1996.
4. Hooper, 『C. S. ルイス文学案内事典』山形和美監訳, 彩流社, 1998.
5. Lewis, *Surprised by Joy*, Harcourt, Brace & World, 1955.
6. Lewis, *All My Road Before Me*, Harcourt Brace & Company, 1992.
7. King, Don W., *C. S. Lewis, Poet*, Kent Univ. Press, 2001.